伊吹山四ヶ寺 ― 神仏習合の歴史 ―

伊吹山は、平安時代の初めに薬師悔過（けか）の修行場として比叡山などとともに七高山に数えられ、伊吹山護国寺が建立されました。仁寿年間（851～854年）に三修上人が入山すると、元慶2年（878年）には国家公認の定額寺（じょうがくじ）となりました。その後さらに発展し、鎌倉時代に伊吹山の中腹に弥高寺・太平寺・長尾寺・観音寺の通称伊吹山四ヶ寺に分かれました。

これらは寺院ですが、その根源にあるのは伊吹山に対する信仰であり、日本古来の神に対する信仰です。明治新政府が発した神仏分離令までは、伊吹山への信仰は、神と仏が混然となっており、麓の伊夫岐神社に対する神事が四ヶ寺共同で行われたり、登山口に鎮座する三之宮神社の祭祀にも四ヶ寺が関与するなどしていました。

弥高寺

弥高寺は、弥高集落の北東、伊吹山頂から南に張り出している尾根上の標高約700mに営まれた山岳寺院で弥高百坊と呼ばれています。現在60を超える坊跡が、山腹に明瞭に残されています。修験の祖といわれる役行者（えんのぎょうじゃ）や白山の泰澄（たいちょう）が入山したと伝わります。

戦国期には京極氏、浅井氏が城郭として使用しており、この時に改修された跡と考えられる遺構が残されています。

長尾寺

長尾寺は、伊吹山頂から北西に派生した尾根の先端、姉川の左岸段丘上に立地する大久保集落の山手に営まれた寺院です。現在、本堂跡を中心に60か所余りの坊跡が遺跡として確認できます。標高240m前後と比較的低いところにありますが、かつてはもっと高所にあったとされています。現在、四ヶ寺の中で唯一かつての面影を留めているのがこの寺院で、寺名は惣持寺に変わっていますが、ほぼ昔の場所にあり、平安時代の二体の仏像が伝えられています。

太平寺

太平寺は、伊吹山から西に張り出す尾根の中程、標高450m付近に営まれた寺院です。鎌倉時代には弥高寺と、伊吹山寺の本寺を争うほどの勢力を持っていました。

京極氏は、太平寺の施設を利用し、ここに城を構えたともいわれています。

昭和38年1月に豪雪で孤立したこと、さらにこの地にセメント工場が進出してきたことを機に全村が、太平寺を護る十一面観音と共に山を下り、その長い歴史を閉じました。

観音寺

観音寺は、鎌倉時代に山を下り、大原荘に伽藍を構えました。大原荘の領家と地頭により勧進されたものとされています。

観音寺は山を降りましたが、伊吹山との繋がりは当然のことながら絶つことはできず、四ヶ寺による祭礼には参加し、四ヶ寺、二社（伊夫岐神社・三之宮神社）による一山組織の一員であり続けました。観音寺は、早くに山を下りたことが幸いし、伊吹山寺の実態が「大原観音寺文書」によって伝えられました。

伊吹山文化資料館のご案内

学術研究の宝庫として知られる伊吹山の麓にある資料館。伊吹山の自然や発掘で見つかった縄文土器などの考古資料、山麓に暮らした人々の生活用具・生産用具など、日本遺産を育んできた米原市の風土と歴史を学ぶことができます。豊富な書籍やパンフレットによる情報収集は是非ここで。

◆開館時間／午前9時～午後5時
◆休館日／月曜日（祝日の場合は開館）、祝日の翌日、12月27日～翌年1月5日
◆入館料／一般個人200円、一般団体（20人以上）160円、中学生以下半額
◆TEL／0749-58-0252

問合せ先
日本遺産米原地域協議会事務局

米原市経済環境部　商工観光課
TEL 0749-58-2227

米原市教育委員会事務局
歴史文化財保護課
TEL 0749-55-4552

米原市　構成文化財①

伊吹山西麓地域

日本には世界に誇る「たから」がたくさんあります。文化庁は、この歴史的魅力にあふれる地域の「たから」たちをさらに磨き上げるべく、我が国の文化・伝統を語るストーリーを「日本遺産」に認定し、国内に、そして世界に発信していく事業を支援しています。

滋賀県と大津市・彦根市・近江八幡市・高島市・東近江市・米原市・長浜市が申請した「琵琶湖とその水辺景観―祈りと暮らしの水遺産」は、平成27年に文化庁から「日本遺産」として認定されました。

日本遺産を構成する文化財として、米原市からは「伊吹山西麓地域」、「東草野の山村景観」、「醒井宿」および「朝日豊年太鼓踊および伊吹山麓の太鼓踊と奉納神社」の4つが選ばれています。

Shiga Biwako JAPAN HERITAGE

伊吹山西麓地域を潤す「出雲井」

伊吹山の概要

伊吹山は、滋賀と岐阜の県境にそびえる標高 1377m の山です。山頂部は米原市に属し、滋賀県の最高峰です。約３億年前に噴火した海底火山であり、地層には古生代に堆積した生物層が含まれ、これに起因する石灰岩が厚く山を覆い、独特の地質環境を形成しています。透水性の高い伊吹山の地質は、大量の雨や雪を地下に浸透させ、麓に良質の湧水地帯を形成し、この水に依拠した生活を支えてきました。伊吹山麓の暮らしの基調をなすのは、伊吹山が生み出す「水」との関わりです。

出雲井

出雲井の名前は、古代に出雲の国の人が開いたからとも、中世に伊吹村の住民、出雲喜兵衛の発案によるものとも伝えられています。現在は、姉川合同井堰から、灌漑期には毎秒３トンもの水が取水され、自然の傾斜を巧みに利用し、分配されます。出雲井は、小田の扇状の分水池に入り、大動脈となる三川に分かれ、さらに間田で五川に分かれます。この五川分水は、流域の面積に応じて川の太さを変え、水が平等に行き渡るように工夫されています。一方の動脈は地下の用水管に入り、井之口の円形分水で再び地上に現れます。サイフォンを利用した巧みな技です。ここから分かれた水は再び地に潜り、姉川の底を通り右岸を潤し、もう一方はさらに下って郷里井となり、姉川左岸の長浜市域のほぼ全域を潤します。

姉川合同井堰

かつて、姉川上流には 20 か所もの井堰が造られ、それぞれが田用水を取水していました。しかし、木材、蛇篭による脆弱な構造は、たびたび井堰の決壊を招き、その維持のため多大な労力と経費を要しました。また、渇水となれば、上流の井堰が独占的に取水することから、流血を伴う水争いも絶えませんでした。昭和 25 年、この地を襲ったジェーン台風は、姉川の井堰をことごとく流し去りました。これを機に、姉川の恩恵を被ってきた流域の人たちは、姉川の水を平等に、そして恒久的に頂くため、伊夫岐神社の傍らに合同井堰を築造しました。昭和 28 年のことです。ここからの水が現代の出雲井であり、郷里井です。

伊夫岐神社

伊吹山で生まれた水が、谷から里に向かって流れ出る口に鎮座する神社が伊夫岐神社です。古い在地の神々が祀られていましたが、現在は、伊吹山を象徴する伊富岐大神という名前の神に統合されています。谷と平野の境目は、山の神の元にあった水が、人間の手に移る大切な場所です。そのため、多くの場合、水配神的な神仏が祀られる聖地となります。伊吹の神の元を離れた水は、出雲井・郷里井と名を変え、今も、広大な田畑を潤しています。

三之宮神社

伊吹山の登山口に鎮座する三之宮神社は、伊吹山に対する信仰の中心的な役割を果たしてきました。舗装された道から登山道に入る分かれ目の下から湧き出る水は、「ケカチの水」と呼ばれています。ケカチとは「悔過池」が由来とされ、薬師如来に対する悔過行（罪を悔い改め、平安を祈る修行）のため、山に入る行者がこの水で身を清めたといわれています。

伊吹の神

伊吹の神は、日本書紀や古事記などの神話に登場します。日本武尊（古事記では倭建命）が東国征討の使命を終え、大和へ帰る途中、伊吹の荒ぶる神を討ち取るため山へ向かいました。そこに伊吹山の神の化身の大蛇（古事記では白い猪）が道を遮ります。武尊はこれを神の使者と見誤り、「使者に用はない。」と蔑み、無視して通り過ぎました。怒った伊吹の神は氷雨を降らせ、霧をかけて谷を曇らせ、武尊を痛めつけます。意識朦朧のまま下山し清水の湧くところ（居醒の清水）で水を飲んで正気を取り戻します。神話でのこの場面は、大和に敵対する豪族などの勢力との戦を表現しているといわれます。